

地域コミュニティと安寧のまちづくり

土井 勉

京都大学大学院工学研究科特定教授
安寧の都市ユニット 副ユニット長

2011年3月11日の東日本大震災は、被災地だけでなく我々の社会のあり方に対して大きな影響を及ぼすことになった。すなわち、我々が近い将来に立ち向かわなければならないと想定されている様々な社会的な課題を、巨大な地震と津波は一気に時間を引き寄せ眼前のものとしたからである。例えば、後継者が乏しくなりつつある農林水産業の今後に関する課題、高齢社会における住宅立地や生活の基盤形成に関する課題、都市構造のあり方など、多くの課題への対応が急務となっている。こうした状況において、その存在と意義が強調されるようになってきたのが〈地域コミュニティ〉である。被災直後の避難所において、地域コミュニティがしっかりしているところでは避難所の運営が円滑にいつているとの話を筆者も何度か耳にしている。

地域コミュニティというと、真っ先に思い起こすのは町内会や自治会である。こうした従来型の地域コミュニティの現状はどうであろうか。

[資料]に示すように、町内会や自治会の活動への参加頻度が次第に減少していることが報告されている。かつて地域コミュニティは、農村における水の配分や農作業の分担などを通じて必要不可欠なものとして形成され、都市においても生産活動や生活を支え合う基盤として重要な機能を持っていた。しかし、その存在が次第に希薄になりつつある。

こうした状況になった背景としては、

- ①地域活動の主な担い手であった、地場の産業や個人商店の衰退・減少
 - ②多世代同居型世帯の減少と核家族や単身世帯の増加
 - ③サラリーマン層の増加による地域で過ごす時間が少ない人の増加
 - ④地域活動への参加の必要性の減退、あるいは参加する魅力の減少
- などが考えられる。

この中で、①の地域で仕事を行い、そして長時間を過ごす人たちの減少は、地域コミュニティを支え活動を牽引するリーダーの育成を困難なものにしていくことになる。しっかりとしたリーダーがいると、人々の気持ちを取りまとめて生き生きとした地域活動が展開されることになる。しかしリーダーが育たない場合には、町内会長なども一年交替の輪番制などとなり、地域コミュニティの希薄化に歯止めをかけることが難しくなる。

また②、③からは、地域コミュニティの活動を行う時間が取れない人たちが増加することで、活動に参加する人の層も薄くなっていくことが理解できる。そうすると、ますますリーダーも育つ可能性が小さくなっていく。

さらに、④の意味は、既存の町内会・自治会活動は古くから伝わる地域活動が中心であり、時代に合致したように変化していないことと共に、福祉や消防など行政組織の縦割りに対応した運営が行われている場合が多い。こうした活動に自身の時間を投入するだけの必要性や面白さ、魅力に欠けていると感じている人々が多いことも参加層が減少することにつながっているように考えられる。

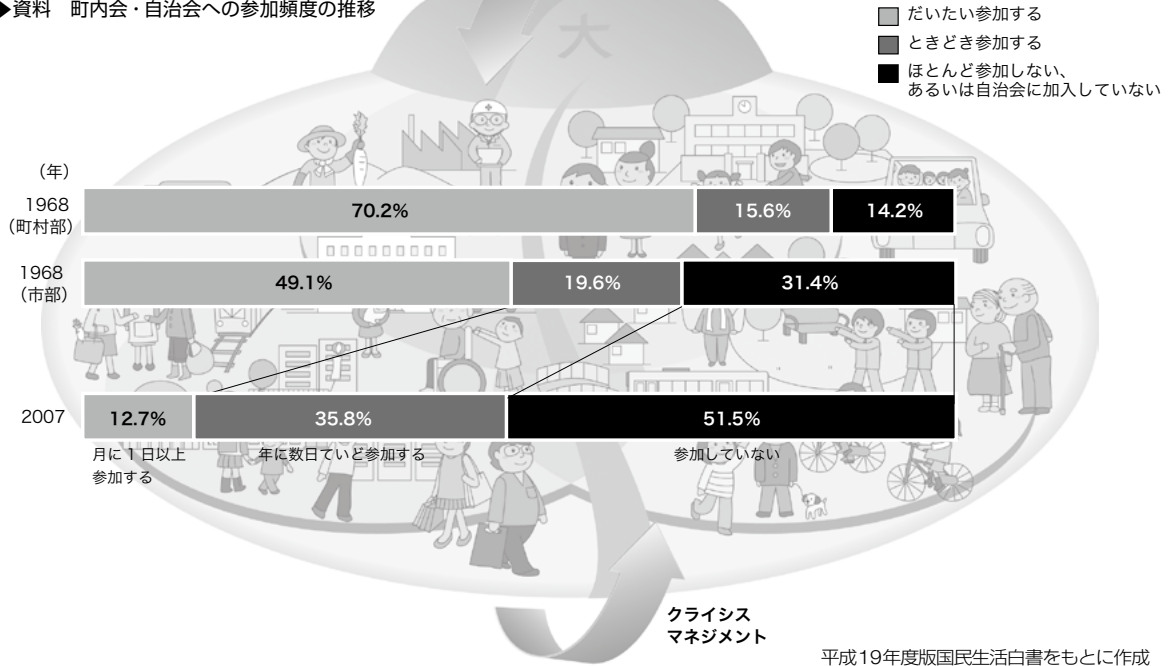
一方で、冒頭に述べたように地域コミュニティの必要性や重要性についても認識が広まっている。例えば、今や大都市周辺部の山間地域など人口が疎なエリアでは、「買い物難民」や「医療難民」が多く発生しつつある。これまでは家族や近親者で支え合ってきたが、これだけでは限界がある。そこで期待されるのが地域における支え合いである。移動を支える仕組みである過疎地有償運送(コミュニティ・バス的一种)などの仕組みを構想し、運営を行っている地域が既に生まれている。こうした取り組みのためには、活動力のある地域コミュニティの存在が不可欠である。

そこで、これからの地域コミュニティの育成・再生を構想する視点について私見を述べたい。

①元気な高齢者を地域コミュニティの担い手として顕在化

これから増加する元気な高齢者は、リタイア後には地域で多くの時間を過ごすことになる。この人たちの潜在するパワーを顕在化させるきっかけづくりができれば、地域コミュニティの活動を担い、新たに変革していくための大きな力になることが期待できる。

▶資料 町内会・自治会への参加頻度の推移



②これまでの活動をベースにした新たな活動の創造

行政のサポート的な活動と伝統的な行事だけでは、従来から継続的な取り組みをしている人たちだけの閉じた活動となり、新規の参加者も増えないし、面白さが減少していく。例えば、宮津市の北近畿タンゴ鉄道岩滝口駅で開かれている地域の婦人会による「ふれあいほっとさろん」では、月に一度の「さろん」を行う人々自身が実に楽しそうであることと同時に、多様な人々との新たな交流を生み出しつつある。また、中心市街地活性化の新たな取り組みとして、まちバル（飲み歩き・食べ歩きイベント）、まちゼミ（店が消費者にゼミ形式で情報提供を行う）など、商店街自身による活動も注目されている。

③地域の持つ価値を掘り下げる

伝統的な地域コミュニティが全て崩壊の危機に瀕しているわけではない。岸和田のだんじり祭などの祭の継続や、宮崎県日南市飢肥の四半的などの地域行事を通して世代交代にも成功している地域コミュニティも多くある。人々が誇りに思える地域の価値や活動の意義に気づき、それを磨いていくことは、持続可能な地域コミュニティを形成するためにも重要なことである。

④思いを同じくする人たちの出入り自由な活動の場

地域コミュニティの活動は居住地などをベースとするために、一度関わり出すと途中で投げ出すことができないというプレッシャーが発生するために参加をためらう人たちも少なくない。こうした囲い込み的な活動も必要であるが、一方で、カフェや公園、病院の待合室、温浴施設など、人々が気軽に集える様々な場所をベースにした「出入り自由」な活動の場も、人と人をつなぐという意味では、新たな地域コミュニティを創造する萌芽となる可能性がある。

⑤徹底的に地域の力を引き出す

他の地域と比較して不足しているものを数え上げるよりも、今あるものを大切にすることで、地域の価値を高める。さらに不足することがあれば、自分たちでできることは行ってしまう。長野県栄村では近隣の人たち自身が「げたばきヘルパー」で介護を支え合う仕組みをつくっている。自分たちでできることは行ってしまうという気風の醸成も地域コミュニティの創造のために重要な視点を提示する。

地域コミュニティの活動を盛んにするためには、これら5つ以外にも様々な視点があるものと考えられるし、この5つの視点についても地域の特性や個性によって軽重が異なる。お手本になる地域を探すことも大切ではあるが、お手本を真似るだけでなく、自分たちにとってふさわしい考え方で望ましい地域コミュニティのあり方を構想することが必要となる。

こうしたことを通して、地域活動を担う人たちの層が厚くなり、リーダーとなる人たちも増加することとなり、地域コミュニティが強く、魅力的になっていく。これは同時に、人々の心に地域に対する誇りや愛着も増加していくことになると考えられる。地域のことを誇りに思う人たちが構成された地域コミュニティのあるまちこそが、安寧のまちと言える。